

//REPORT//

令和 5 年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

7/6(木)開催 第 2 回

「ジオパークとは？～ユネスコスクールの活動への取り上げ方～」



ユネスコスクール事務局では、令和 2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を 1～2 か月に 1 回のペースで実施しています。今年度第 2 回目は「ジオパークとは？～ユネスコスクールの活動への取り上げ方～」と題して、15 名の参加者と対話の場をもちました。

■ プログラム

開催日時:2023 年 7 月 6 日(木) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	オープニング 趣旨説明 ACCU 教育協力部 部長 大安喜一
16:05	事例紹介 日本ジオパークネットワーク 事務局長 古澤加奈氏 コメント ACCU 参与 渡辺一雄氏
16:25	グループディスカッション 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:45	振り返り グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。(良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:00	クロージング

■ 事例紹介

日本ジオパークネットワーク 事務局長 古澤加奈氏よりご発表いただきました。以下、概要です。

はじめに

現在、日本には合計 46 のジオパークがあります。そのうちの 10 か所が「ユネスコ世界ジオパーク」に認定されています。この「ユネスコ世界ジオパーク」という名前についてご説明いたします。平成 27

(2015)年 11 月ユネスコ総会での決定を受けて、「ジオパーク」はユネスコの正式事業となりました。それまでは「ユネスコ」は冠せず、ユネスコが支援している「ジオパークプログラム」という位置づけでした。続いて「ジオパークとは」¹についてご紹介いたします。ジオパークについては、「地質・地形から地球の過去を知り、未来を考えて、活動する場所」であると説明しています。ジオパークはひとつにまとまったエリアであり飛び地ではいけないというルールがあります。市町村の境界で区切っているところが多いです。「地層」から分かることは多くあり、例えば、過去にどのような災害があったか、どのような生き物が生きていたか等です。どのような環境だったかを知ることにより、未来のことを予想することも可能になります。地形によって食べ物も変わってきます。例えば、深海が近ければ、様々な種類の深海の生き物が取れます。そのような「恵み」から特産品を開発し地域の経済が潤うように、もっと発展していくような活動もしています。またツーリズムと教育にも力入れており、「教育旅行」のホストになっているところも多いです。

日本ジオパークネットワークについて

そのようなジオパークが集まり、私が働いている「日本ジオパークネットワーク」が平成 21(2009)年に設立されました。準備段階を含めると、平成 19(2007)年頃から日本で準備を始めてこのネットワークを作りました。今は NPO 法人となっています。正会員は日本ジオパークに認定されている 46 地域、準会員は今後日本ジオパークに申請しようとしている 7 地域です。ジオパークはネットワーク活動とボトムアップのアプローチを非常に大切にしています。日本ではこの「ネットワーク活動」が急速に広がりました。それは需要があったからだと考えられます。国によって事情が異なりますが、日本の場合は様々な省庁に働きかけました。初めは直接的なサポートがありませんでしたが、市町村単位、あるいは県等の補助を受けながら地方自治体で進めていきました。最初は誰もジオパークのことを日本では知らなかったので、まず情報を集めたり、地球科学の専門家とつながったりすることが必要でした。特にジオパークは海外で始まったプログラムであるため、英語の翻訳を分担して進めていき情報を共有するというようなことも、ネットワークを活かして取り組んできました。

全国大会について

日本ジオパーク全国大会²を一年に一度どこかのジオパークで開催しています。多いときには千人程度の参加者が集まる大会です。例えば、北海道のアポイ岳ユネスコ世界ジオパークで全国大会を開催した際には、開会式にてアイヌの民謡と踊りが披露されました。無形文化遺産にも着目し、文化遺産と地質遺産のつながりを解き明かしたりしています。また文化遺産と地質遺産、両方とも保全して大事につないでいこうという活動もしています。令和 4(2022)年の第 12 回日本ジオパーク全国大会は石川県の白山手取川ジオパークで開催されました。白山手取川ジオパークは令和 5(2023)年 5 月 24 日に日本で 10 箇所目のユネスコ世界ジオパークとして認定されました。この大会のテーマは

¹ 詳しくは日本ジオパークネットワーク ホームページ「[ジオパークとは](#)」をご参照ください。

² 詳しくは日本ジオパークネットワーク ホームページ「[日本ジオパーク全国大会](#)」をご参照ください。

「地球と旅する」で、「地球で旅する」ではなく、「地球と一緒に旅をする」という思いが込められました。この大会では、事前にマイボトル・マイ箸・マイバッグ持参を呼びかけるキャンペーンも行っていました。

「国連海洋科学の 10 年」

「国連海洋科学の 10 年」が令和 3(2021)年から開始されており、日本ジオパークネットワークとして「国連海洋科学の 10 年における取り組み宣言」を出しています。初年度にはキックオフイベントを開催し、令和 5(2023)年 3 月にも国際シンポジウムを開催しました。国際シンポジウムのテーマは海洋ごみでした。ここでジオパークでの具体的な取組を紹介します。糸魚川ユネスコ世界ジオパークでは、プラスチックごみが 1000m 深いところにもあるということを訴えたり、地元の学校と連携しみんなでビーチクリーニングをしたりしています。子どもたちは海外から地元に移住してきたアーティストの方と共に、集めてきたごみを使って作品を作り、それを展示したりしています。伊豆半島ユネスコ世界ジオパークでも同じように海洋ごみをみんなで集めてきて、アートにつなげられないかということで、拾ってきたごみでグッズを作るというようなワークショップが開かれています。

■ 続けて、各地のジオパークの取組についてもご紹介いただきました。お話が挙がったジオパークは以下の通りです。

-
- ☆(高知県)[室戸ユネスコ世界ジオパーク](#)
 - ☆(北海道)[アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク](#)
 - ☆(北海道)[洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク](#)
 - ☆(長崎県)[島原半島ユネスコ世界ジオパーク](#)
 - ☆(北海道)[三笠ジオパーク](#)
 - ☆(福井県)[恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク](#)
 - ☆(島根県)[隠岐ユネスコ世界ジオパーク](#)

■ コメント

ACCU 参与 渡辺一雄氏より、事例紹介を受けて下記のコメントをいただきました。以下、概要です。

ジオパークとユネスコスクールが同じユネスコ事業でありながら、連携の具体的な事例があまりに少ないという問題意識がある。難しさ・やりづらさもあるかと思うが、それぞれの領域にとどまらない、ジオパークとユネスコスクールの連携の在り方を探っていくことが望ましい。

■ ディスカッション

日本ジオパークネットワーク 事務局長 古澤加奈氏のご発表と ACCU 参与 渡辺一雄氏のコメントを受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

-
- 場所によって学校とジオパークが連携できているところとできていないところがあるため、で

きてないところに関してはどのようなアプローチをすればいいのが課題である。

- 教員がそもそもそういうジオパークというものを知っているのだろうか。県単位や地域単位で研修のようなものができたら良いと思う。なかなかジオパークと触れる機会がないため、学校向けのプログラム等を紹介していただけたら活用できるのではないだろうか。例えば「防災教育」の中での火山活動であったり、地震の活動であったりということがプログラムの一つとして位置づけられるのではないだろうか。
- 先生方がジオパークに馴染みがないという課題もあるが、日々の業務の中でなかなかそこまで手が回らないという現実もある。
- ジオパークが提供する内容は環境教育や防災教育と結びつくような内容であるとは思いますが、それは本当にジオパークが望んでいる形なのだろうか。
- 探究学習などで授業を通して地域を知ることは、ESD で特に重要な「自分ごとにする」ことにつながるのではないか。
- 学校にとって、ジオパークに限らず、世界遺産やエコパークといった何らかの地域認証が行われている場所は、地域資源について系統立てて学ぶ際に非常に有効である。同時に、学習活動を行う際に相談する相手がいるということも大きなメリットである。一方で、おそらくジオパークはコンテンツを提供するという部分がメインになってくるかと思う。学校側がそのコンテンツを体験活動だけで終わらせないためには、コンテンツを使いこなす力や、あるいはカリキュラムデザインを意識していくことが必要になるのではないか。



[オンライン意見交換会の様子]

※オンライン意見交換会に関し、お申込み方法などの詳細は、[ユネスコスクール公式ウェブサイト](#)内「最新情報」、[ユネスコスクール公式 Facebook](#)に掲載中です。ぜひご参加ください！